

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 6章3～11節

³それともあなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が減ばされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。⁹そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。¹⁰キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。¹¹このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書 28章1～10節

¹さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。²すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。³その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。⁴番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。⁵天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、⁶あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。⁷それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」⁸婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。⁹すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。¹⁰イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

イースターの朝【こども説教のために】

イースターおめでとうございます。主イエスのご復活を祝うイースターを迎えました。十字架の上で死なれた主イエスは、墓に葬られて三日目、週の初めの日の朝、ご復活なさったのです。

その日の朝、死んだ主イエスのご遺体が葬られた墓を見に行ったら女性たちは、驚きました。大きな地震が起こり、天から主の天使が降ってきたからです。主の天使は、墓の入口を塞いでいた大きな石を転がして、その上に座りました。その姿は光り輝き、雪のように真っ白の衣をまといっていました。墓を見張っていた番兵たちは、恐ろしくなって震え上がり、固まってしまいましたが、女性たちは、その様子をしっかりと目に焼き付けていました。そして、天使が告げる言葉を聞いたのです。

「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。…復活なさったのだ。さあ、…見なさい。」

そう言われて見た墓の中に、主イエスのお姿はありませんでした。十字架の上で死なれた主イエスのご遺体は、確かにこの墓に葬られたはずでしたが、見当たらなかったのです。

「主イエスのご遺体は、どこに行ってしまったのだろう」と不安になった者もあったかもしれません。ご遺体を捜しに行こうと思った者もあったかもしれません。けれども、天使の告げたことを信じた者もありました。

「あの方は…復活なさったのだ。」

天使はさらに告げました。

「急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。…ガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』…。」

そうです。「あの方は復活なさった」と伝えなければなりません。天使が「あの方は復活なさった」と告げてくれたとおり、弟子の仲間たちに告げなければなりません。「あの方は復活なさった。」

弟子たちに伝えるために走って行った女性たちの行く手に、一人の人が立っていました。「おはよう」と、その人は、挨拶をしてきました。女性たちは、その人に近寄り、足を抱いてひれ伏しました。「おはよう」と挨拶をしてくれたその人こそ、ご復活なさったあの方だと分かったからです。

イースターの朝、「おはよう」と挨拶をしてくれる人がいます。死んだように無言の人ではなく、「おはよう」と挨拶をしてくれる人です。生きていて、挨拶をしてくれる人。あのお方です。ご復活なさったあのお方です。わたしたちも、ご復活なさったあのお方とお目にかかるのです。

キリストと共に

主のご復活、イースターの朝を共に迎え、祝いの礼拝へと集うことが許されました。この日を毎年大切に迎えてきた者も、そうでない者も、わたしたちは皆、この祝いの礼拝へと集められてきました。

この祝いの中で、昨年のイースターに続いて、一人の洗礼式を執り行います。世界中の多くの教会でも、このご復活の祝いの中で、洗礼式が執り行われていることでしょう。古来、イースターが洗礼を受けるのにふさわしいときとされてきたのです。もちろん、洗礼は、いつ、どこで受けても良いのです。実際、聖霊降臨祭（ペンテコステ）や降誕祭（クリスマス）、あるいは特別な祝いの日ではない主日の礼拝、また主日の礼拝でさえないときに自宅や病室で、洗礼式を執り行うこともあります。

わたし自身が受けた洗礼式は、ちょうど 40 年前のクリスマス礼拝でのことでした。わたしが育った教会では、当時、クリスマスが一年で一番盛大に祝われていましたから、クリスマスに洗礼を受ける人は多かったのです。「洗礼を受けるならクリスマスが良い」とおっしゃる先輩もいました。

25 年前、神学校を卒業して牧師として教会に仕えるようになった頃には、まだまだ、どの教会でもクリスマスに洗礼を受ける人が多かったようです。前任地教会では、最初の五年間に 11 人の受洗者がありましたが、ほとんどの方がクリスマスで、イースターに洗礼式を執り行った方はありませんでした。ところが、終わりの五年間では 14 人の受洗者のうち半数がイースターでの洗礼式になっていました。牧師のわたしがそのように誘導してしまったのかもしれないませんが、イースターで洗礼を受けることを良しと考える方が増えたのは確かでした。

イースターに、教会は、主イエスのご復活を記念し、祝います。十字架で死に、葬られた方のご復活です。その、死んで復活された方と、洗礼によって結ばれると教えたのは、使徒のパウロでした。洗礼は、主イエスとわたしたちを結びつけるしるしの儀式です。「神の子」としての模範をお示くださった主イエスと結びついて、「神の子」として生き始めるのです。教会が洗礼を授けるとき、本人の決意だけでなく、教会がそのことを共に始めます。洗礼を受けた人に、教会は、「あなたは神の子」と生涯にわたって告げ続けるのです。洗礼を受けた者は、キリストと共に、そして教会と共に、「神の子」として生きる道を歩み続けるのです。パウロは、そのような洗礼によって「神の子」として生きる者は、ひとたびキリストと共に死に、キリストと共に生きるようになった者なのだ、と教えたのです。

「おはよう」

キリストは、**死者の中から復活させられました**。わたしたちがキリストと共に死に、キリストと共に生きる、と言うとき、わたしたちは、死者の中にはなく、復活させられた新しい命の中に生きるようにされているのです。

十字架の上で死なれて、墓に葬られた主イエスのご遺体は、死者の中にあるはずでした。けれども、週の初めの日の朝、墓を見に行った女性たちが目の当たりにしたのは、空の墓と、彼女らに語りかける主の天使の姿でした。死者の中に主イエスを捜さないようにと、主の天使は告げたのです。復活された方を捜すように、あなたがたにお会いくださる方のところに行くように、と言うのです。

「おはよう」。何と拍子抜けする挨拶でしょうか。「こんにちは」、「こんばんは」、「ごきげんよう」。どのようにも訳せる、何の変哲もない言葉で、挨拶が告げられました。けれども、その挨拶を告げた人こそが、彼女らの捜していたお方、見出したお方でした。死んだ方ではなく、復活して生きて挨拶をしてくださるお方でした。

愛する皆さん。弟子たちの教会は、この挨拶を聞くために、週の初めの日、すなわち日曜日の朝ごとに、集まってきたのです。「おはよう」と挨拶してくださるお方。生きてご挨拶くださるお方。そのお方に、教会は、日曜日の朝ごとにお会いするために、集まっているのです。

イースターの朝。この世界は、相変わらず、死者のように互いに挨拶を交わすことを忘れていました。そのような世界に引き込まれそうになるわたしたちの前に、主の天使が現れて告げて行きました、「あの方は死者の中から復活された。あなたがたより先に、教会に行かれる。そこでお目にかかれる」と。わたしたちは、日曜日の一日を、死んだように横たわって誰にも会わずに済ますこともできたのです。にもかかわらず、主の天使が、寝床に横たわるわたしたちを目覚めさせ、起き上がらせ、立ち上がらせ、行かせたのです、教会へ。「おはよう」とご挨拶くださるお方とお目にかかれるように。

「おはようございます」。日曜日の朝の教会で、そう挨拶してくださる方と共に生きていくのです。ここで、そう挨拶してくださる方があることを、繰り返し確かめるのです。死んだように口を閉ざし、挨拶を拒む者にも、そのお方は、挨拶してくださるでしょう、「おはようございます」と。そのお方と共に、死んだ者の中から復活させられ、「おはようございます」との挨拶を交わす者たちの中に、自分自身を見出されるようになるまで。そのお方と共に、わたしたちも、「おはようございます」と挨拶し続けるのです。